

長崎市方言のトク・ヨクについて

辻 夏洋*

1 はじめに

長崎市方言には以下のような表現がある。

- (1) 友人とレストランで食事をする約束をしていたが、友人が遅れることがわかったので「お腹がすいたから先に食べておくね」と電話で伝える場合。

オナカノスイタケン タベトクバイ
オナカノスイタケン タベヨクバイ

この例の場合、「トク」と「ヨク」は似ているように見え、また同じ意味になりそうである。「トク」は共通語の「テオク」に対応する形式であるが、「ヨク」は管見によると、あまり広くは知られていない形式のようである。「ヨク」はどのような文法的働きを持っているのだろうか。トクなどの他のアスペクト接辞との関係はどうなっているのだろうか。以下に考察をすすめていく。また、最後にこの形式の地理的分布域についても簡単に触れる。

なお、本稿で掲げる使用例は全て長崎市方言ネイティブである筆者が考え、念のために他の長崎市在住ネイティブに電話で使用できるかどうかの確認をとったものである。

2 「ヨク」の分析

「トク」は様々な先行研究でアスペクト接辞として扱われている。(1)の例を見ると「トク」と「ヨク」は同様の使われ方をしているように見えるので、「ヨク」もアスペクト接辞とみてよいように思われるが、この点から考えてみよう。

2.1 「ヨク」と「トク」の統語論的分析

2.1.1 「トル」「ヨル」との比較から見る「トク」「ヨク」の統語論的相違

使われ方が似ている「ヨク」と「トク」であるが、長崎市方言ネイティブである私の内省によれば使用方法に違いがあると考えられる。その違いは長崎市方言のアスペクト接辞同士を共起させたときにはっきりと見られる。長崎市方言に見

*つじ・なつひろ。信州大学人文学部卒業生（2006年3月）

られるアスペクト接辞には「トク」「ヨク」「トル」「ヨル」などがあり、それらを共起させると以下のようになる。

(2)*食ベトットク	(トル+トク)	*食ベヨットル	(ヨル+トル)
食ベトリヨル	(トル+ヨル)	*食ベヨットク	(ヨル+トク)
食ベトリヨク	(トル+ヨク)	*食ベヨリヨク	(ヨル+ヨク)
*食ベトットル	(トク+トル)	*食ベヨットル	(ヨク+トル)
食ベトキヨル	(トク+ヨル)	*食ベヨットク	(ヨク+トク)
*食ベトキヨク	(トク+ヨク)	*食ベヨキヨル	(ヨク+ヨル)

まず「ヨク」「ヨル」が「トク」「トル」より前に現れないが、これは統語論的な位置の順序として「トク」「トル」が「ヨク」「ヨル」の前に現れる仕組みになっているためと考えられる。

次に「トク」「トル」、「ヨク」「ヨル」は共起できないが、これは統語論的な位置が同じで、1の統語論的な枠から2つの形式が現れる事ができないためと考えられる。

そして問題となるのは「トク」と「ヨク」が共起できないことであるが、これは何故か。まず「トク」と「ヨク」が同じ統語論的な枠に入っているので共起できないという可能性が考えられる。しかし、「トク」と「ヨク」の「トル」との共起を考えると、「ヨク」は共起できるが「トク」は共起できないので違う枠である可能性も十分にあり、真偽は分からない。この共起の問題については2.1.2で考えていく。

ここで「トク」と「ヨク」の統語論的相違を考えるに当たってこれまで同じ統語論的な枠で一對をなすアスペクトとして考えられてきたが、実際は統語論的な位置が違うことが証明された「トル」と「ヨル」を参考にして考えてみる。

「トク」と「ヨク」の統語論的相違を考えるに当たって、「トル」と「ヨル」の先行研究として丹羽一彌(2005)を取り上げる。丹羽(2005)は岐阜県土岐市、愛知県犬山市と江南市の方言を取り上げ、「トル」と「ヨル」について7つの文法的相違を挙げ、[命題]を構成する形式が「トル」で[判断]を構成する形式が「ヨル」であることを指摘し、両者が職能の異なる別の二種類の形式であることを述べている。丹羽(2005:87)では述語の枠組みとして、この順序で連続させればアスペクトを含めて複数の接辞が共起させられるとして、以下のように示している。このうち1~5が[命題]である。

1	2	3	4	5	6	7
[使役	受動	授受	テマウ	トルなど]	ヨル	尊敬

さらに丹羽(2005:91)では「ヨル」は尊敬の接辞と逆の順序で現れることができるが、「トル」は現れないことを示している。「トル」と「ヨル」は尊敬の接辞と共に現れる場合、接辞の順序としては、「トル」と「ヨル」は尊敬の接辞の前に

現れる。しかし、タの接続する表現では「ヨル」と第三者への尊敬を表す尊敬の接辞-aQse-と逆の順序で現れることがあるとしている。-aQse-が接続した形式は名詞化しないので、-aQse-は[判断]の形式であり、その後に現れる事もある「ヨル」は[判断]であることが確認でき、「トル」は[命題]を構成する形式だから、このような逆転現象はないとしている。

従来西日本型方言の「トル」と「ヨル」はアスペクトを表す形式として一対に扱われる事が多かったが、こうして形式の側から「トル」と「ヨル」を見ると明らかに一対のものではなく、個々に違う職能を持つ形式であることがわかる。この丹羽(2005)の結論を支持したい。

先の(2)にも示したが、長崎市方言の「トル」と「ヨル」についても、高年層において「昔はよく食ベトリヨッタ」のように「トル」と「ヨル」が共起する例が確認できた¹。若年層では確認できなかったので長崎では古い言い方と考えられるが、これは丹羽(2005)と同じ結果であり、長崎市方言でも「トル」は[命題]を構成する形式で、「ヨル」は[判断]の形式であることが分かった。

ここで話を戻し、「トル」と「ヨル」の文法的な関係を見ていった結果と同様のことが、「トク」と「ヨク」にも言えるか考えていく。長崎市方言で「トク」と「ヨク」も共起することができれば、「トル」と「ヨル」と同じ文法的関係であることが言えるが、前に述べたように共起は見られなかった。

しかし、客観的な[命題]を構成する「トル」と主観的な[判断]の「ヨル」と同様の関係が「トク」と「ヨク」にも成り立つと思われる。以下に例を挙げて解説する。

(3) Aヲ カイトキヨッタ (Aをよく書いておいた)

a × [Aヲ書く+トク+ヨル+タ]

b [[Aヲ書く+トク]+ヨル+タ]

(4) Aヲ カイトリヨッタ (Aをよく書いていた)

a × [Aヲ書く+トル+ヨク+タ]

b [[Aヲ書く+トル]+ヨク+タ]

両方の共起した例で考えると、(3a)(4a)の様に「トク」「ヨル」、「トル」「ヨク」が並列しているのではなく、(3b)(4b)の様に「トク」「トル」は[命題]を構成し、「ヨク」「ヨル」は主観的な[判断]を構成している事が分かる。(5)のように考えると、カイトクとカキヨクの違いも分かりやすい。

(5) カイトク [[書く+トク]]

カキヨク [[書く]ヨク]

¹調査は、長崎在住の外住歴の無い人を対象として自然会話を合計約2時間録音した。対象者の内訳は男性70歳、37歳、28歳、22歳の4名と女性が77歳、58歳、57歳、56歳、25歳、23歳の6名の計10名である。考察はこの録音テープを文字に起こした資料をもとに行った。また考察に必要で、現在ある資料では十分でない場合には電話で確認をとった。さらに十分でない場合には繰り返し面接調査を行った。

このことから、「トク」は一般的な動詞と同様に客観的な[命題]を構成する形式であるのに対し、「ヨク」は話し手の主観的な[判断]を構成する形式である事が分かる。これにより、丹羽(2005)が指摘する「トル」と「ヨル」の違いと同様のことが「トク」と「ヨク」についても言える。

2.1.2 「トク」「ヨク」と「トル」「ヨル」の共起の制限

(2)でトク+ヨルとトル+ヨクの共起した例を挙げたが、長崎市方言の高年層では「トル」と「ヨル」の共起が見られるが、若年層では共起が見られなかった。これと同様に「トク」と「ヨク」の共起を電話で確認してみたが、高年層でも若年層でも共起が見られなかった。これは「トル」「トク」、「ヨル」「ヨク」がそれぞれ同じ枠に入っていると考えられるので共起できるはずであるが、共起ができない。これは何故だろうか。昔は使えたが現在では使われなくなっているのか、そもそも共起することができないのか、それを考察するために仮説を2つ立てた。

- ① 実際は「トク」と「ヨク」が同じ統語論的枠に入っているのではないか。
- ② 文法の問題ではなく別の理由に因るのではないか。

まず①から考えると、「トク」と「ヨク」が同じ統語論的枠に入っていれば「トク」と「ヨク」は共起できるが、2.1.1での考察から「トク」と「ヨク」は別々の統語論的枠に入っていると考えられるので①の可能性は極めて低い。

次に②を考えると、文法的には共起できるのだが別の理由、例えばもっと高年層より昔の世代では使うことができたが現在は使う事ができなくなってしまうか、「トク」と「ヨク」の共起で言い表せる状況が極めて複雑かつ限定的なため想定が困難などの理由で「トク」と「ヨク」が共起できないと考えると、可能性は十分ありそうである。しかし、本稿の調査や考察ではもっと高年層より昔の世代では「トク」と「ヨク」が共起したものが使えたという事実は掴めなかった。また、あらゆる状況を想定して考察したが「トク」と「ヨク」の共起は見られなかった。

しかし、私は「トク」と「ヨク」も丹羽(2005)の「トル」と「ヨル」と同様に統語論的枠が分かれていると考えておきたい。その理由は、「トク」が[命題]を構成する形式で、「ヨク」が話し手の主観的な[判断]を構成する形式であると分かった以上、別々の統語論的枠に分かれて入っていると考える方が理解しやすいからである。よって、共起例が確認できないのは、統語論的枠ではなく、「トク」と「ヨク」の共起で言い表せる状況が極めて複雑なため、状況の想定が困難なのではないだろうか。正確な理由の特定は問題として残しておく。

2.2 「ヨク」と「トク」の意味論的分析

これまでの考察で「トク」と「ヨク」が個々に違う職能を持つ形式であることを明らかにしたが、(1)から分かるように「トク」と「ヨク」は標準語訳すると同じ意味になりそうである。

しかし、同じ意味であるならば2つも表現は必要ないはずであるから、「トク」と「ヨク」には何らかの意味違いがあると考えられる。ここからはどのように「ト

ク」と「ヨク」では意味が違うのか明らかにしていく。

2.2.1 状況から見る「ヨク」と「トク」の意味論的相違

冒頭で(1)の例を挙げたが、さらに2例を加えて考えて見よう。

- (6) 友人とレストランで食事をする約束をしていたが、友人が遅れることがわかったので「お腹がすいたから先に食べておくね」と電話で伝える場合。
(= (1))

オナカノスイタケン タベトクバイ
オナカノスイタケン タベヨクバイ

- (7) 友人と一緒に映画館に行く約束をしていたが、寝坊をしてしまったので「寝坊したから先に行っていて」と電話で伝える場合。

ネボウシタケン サキニ イトツテ
ネボウシタケン サキニ イキヨツテ

- (8) 市役所の窓口に来てきたお客さんの応対中に手の離せない仕事が入ったので、「この書類を書いていてください」と伝える場合。

コノショルイバ カイトツテクダサイ
コノショルイバ カキヨツテクダサイ

まず(6)の例で考えると、一見「ヨク」と「トク」で意味の違いは無いように見える。

しかし、友人が到着した時にまだ食べていないのか、今まさに食べ始めているのか、食べ始めて少し時間が経ってからなのか、食べ終わっているのか、つまりどのような状態であるかで「トク」と「ヨク」の間に違いが現れる。「トク」であればどの状態であっても構わないが、「ヨク」の場合はもう食べ終わった状態では使えない。友人が到着した時にはせめて食べている状態でないと「ヨク」は使えないのである。もし食べ終わっていたならば、「何で食べるのを待っていてくれなかったのか」と友人に怒られる事もあり得る。分かりやすくするために(6)の例に友人の遅刻の程度を加えると(9)(10)のようになる。

- (9) 友人とレストランで食事をする約束をしていたが、友人が交通渋滞に巻き込まれて1時間以上遅れることがわかったので「お腹がすいたから先に食べておくね」と電話で伝える場合。

オナカノスイタケン タベトクバイ
×オナカノスイタケン タベヨクバイ

- (10) 友人とレストランで食事をする約束をしていたが、友人が郵便局に寄ってくるため 10分程度遅れることがわかったので「お腹がすいたから先に食べておくね」と電話で伝える場合。

オナカノスイタケン タベトクバイ

オナカノスイタケン タベヨクバイ

もう食べ終わった状態では「ヨク」が使えないのは、「ヨク」を使う場合には少しの時間を経た未来の相手の行動を予測している＝主観的な推量が含まれるからと考えられる。

(10)で説明すると、食べヨクと言った場合には相手がそう時間がかかることなく合流し、一緒に食べることを予測している。ただ実際には相手に急用ができたりして合流できないかもしれないが、本人が相手のレストランに到着するまでかかる時間や歩く速度、交通状態などの複数の要素を加味して予測できた場合に「ヨク」が現れる。もし(9)のように相手が電話した時にすでにいつ到着できるかわからない状態であれば「食べトク」となり、「トク」が現れる。また、食べトクと言った場合には突然にすぐに到着できるようになっても一向に構わない。つまり「トク」を使う場合には、客観的に「食べておく」ことを伝えているだけで他の要素はない。しかし、「ヨク」を使う場合には「食べておく」ことを伝えるのに加えて、証拠性 (evidentiality) を有した主観的な推量が行われているのだ。

(6)の「寝坊したから先に行っていて」でも「ヨク」を使える場合は、一緒に映画館に行く約束が前提にあるので、開演までに相手に追いつける予測が立った時点で、それ以外の追いつける予測が立たない時は「トク」が現れる。

(8)の「この書類を書いてください」でも「ヨク」を使える場合は、応対中という前提があるので、手の離せない仕事の後に応対に戻れる予測が立った時点で、それ以外の応対に戻れる予測が立たない時は「トク」が現れる。

また、「ヨク」は相手の事を配慮して使われることから、長崎市方言では二次的な意味として丁寧語として使われることがある。(8)の状況が病院の受付で行われており、看護師に手の離せない仕事が入り、書類を書いているのが患者だった場合で解説すると、まず看護師が「カイトツテクダサイ」と言うと、患者は看護師が長時間かかるかもしれないと思うと同時に事務的な印象を受ける。一方看護師が「カキヨツテクダサイ」と言うと、患者は看護師がすぐ戻ってきて対応してくれると思うと同時に相手の自分への配慮を感じるため、親近感から丁寧な印象を受けると考えられる。

また、このように「ヨク」には明らかな主観が入るので、意味論的な分析からも「ヨク」は[判断]の形式と考えられ、「トク」は客観的に事柄を伝えるだけなので[命題]を構成する形式と考えられ、2.1で統語論的に分析した結果を裏付けている。

3 「ヨク」の地理的分布

さて、これまでは長崎市方言の「ヨク」の意味や職能について述べたが、後学のために、最後に「ヨク」の地理的分布について簡単に触れておく。

3.1 「ヨク」の分布域

「ヨク」の分布域を明らかにするため、電話による確認調査を行った。こちらで想定した質問に [使用する・意味は分かるが使わない・知らない] の何れかで答えてもらった。

調査地点は長崎県長崎市、同県佐世保市、佐賀県佐賀市、福岡県福岡市、大分県東国東郡国見町、熊本県熊本市、鹿児島県鹿児島市、宮崎県宮崎市、同県延岡市、山口県山口市、同県下関市、広島県広島市、同県福山市、島根県出雲市、岡山県岡山市、兵庫県神戸市、京都府船井郡京丹波町、愛媛県松山市、香川県観音寺市の19地点である。調査対象者はその土地で生まれ育った5年以上の移住歴の無い20～22歳の人々である。

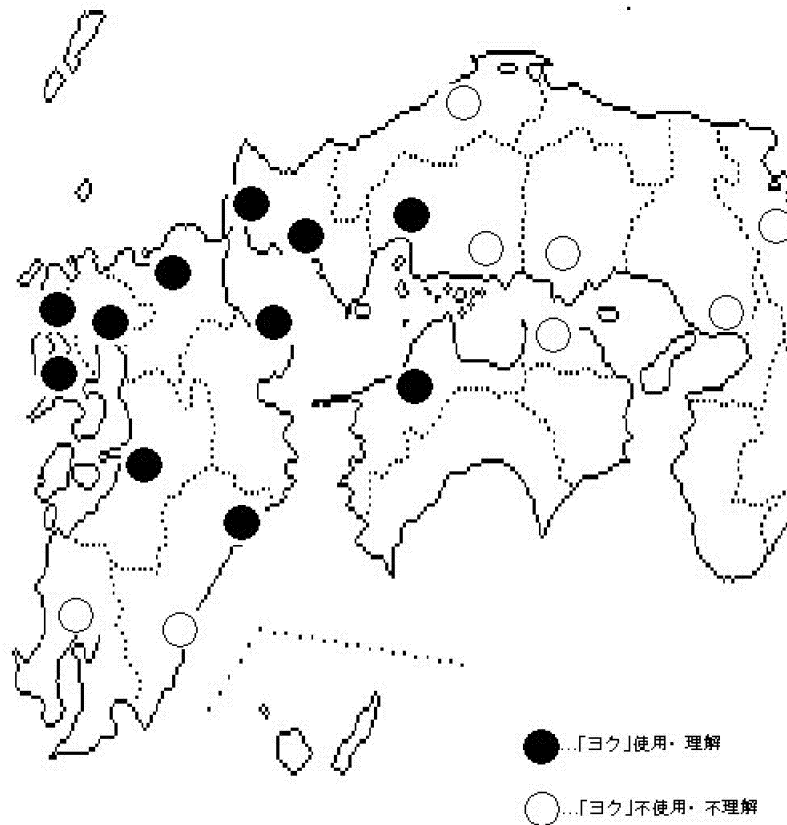


図1: 「ヨク」の地理的分布

図1は調査の結果である。これにより「ヨク」は九州地方の中北部から中国地方の西部、四国地方の西部まで分布している事が分かった。ヨクが西日本に広く

分布しているに比べると、ヨクの分布域は狭いといえそうだ。この分布がヨクのどのような歴史的背景を反映しているかについては、後学に期したい。

4 まとめ

本稿で「ヨク」について明らかにしたことをまとめておく。

1. 「トク」「ヨク」は「トル」「ヨル」と関係が非常に似ており、「トク」「トル」と「ヨク」「ヨル」はそれぞれ統語論的に同じ位置を占める形態素であり、「トク」「トル」は[命題]を構成する形式で「ヨク」「ヨル」は主観的な[判断]を構成する形式である。
2. 「ヨク」には動作以前から動作進行中の状態で実現状態の維持を表す意味があり、「トク」と「ヨク」の意味の比較では「トク」はあらゆる状態で使えるが、「ヨク」は動作が終了した状態には使えないという違いが見られた。
3. 「ヨク」は九州地方の中北部から中国地方の西部、四国地方の西部まで分布している。

引用及び参考文献

1. 金田一春彦編 (1976)『日本語動詞のアスペクト』(むぎ書房)
2. 徳川宗賢・W. A. グロータース編 (1976)『方言地理学図集』(秋山書店)
3. 丹羽 一彌 (2005)『日本語動詞述語の構造』(笠間書院)
4. 南 不二男 (1962)「文法」(『方言学概説』武蔵野書院)
5. 南 不二男 (1974)『現代日本語の構造』(大修館書院)
6. 南 不二男 (1993)『現代日本語文法の輪郭』(大修館書店)
7. 国立国語研究所 (1979)『方言談話資料(2)―奈良・高知・長崎―』
8. 日本放送協会 (1966)『全国方言資料 第六巻 九州編』